

歴史物語 信行の侍女

永代美知代

(下)

さても勝子は、あはれ着もならばぬ木綿の破れ衣に、乞食女の様を装ひ、住み馴れた故郷を後に、美濃路へ入つて行きましたが、一先づ稲葉の町の知己の家に身を寄せました。

敵佐久間は當時稲葉城中に居て、城主齋藤道三の御おぼえ目出たいとの噂が高い、勝子はどうがなして佐久間に近づく術もがなと、夜晝心を碎いて居りました。

それには如何しても、勝子自身、城中に入る工風を第一にしなければなりません。勝子は京の田舎か

春ともなれば新年の御儀式など、とり／＼に面白く、忙がしい。わけてもお奥の賑はしさ、歌加留多に、貝合せに、勝子は七草過ぐる頃までも、たゞ華やかに夢のやうな日のみ送り迎へました。

と、ふとした噂に、勝子は思はず胸をおどらせました。

『十五日の騎射のお催しには、佐久間殿も出られるさうな。』

十五日の騎射、佐久間——新参者の勝子は、何の事か委しい事は解りませんでした。けれども敵佐久間の名のからまつてゐる以上、どうしてそのまゝ聞きのがして居られませう。勝子は氣取られぬやう、強て何の氣もない様子を装ひ、話の間々にそれとなく騎射の催しに就いて訊きました。

齋藤家では毎年正月十五日に騎射の催しといふのが行はれる。そして十五人の選手を家中の武士から選び出し、殿の御前にその武勇の程を御覧に入れる習慣なのでした。

ら、はる／＼武家奉公を望んで出て来たものゝやうに云ひこしらへ、傳手を求めて、齋藤家のお奥につとめようとなりました。そして運よく道三夫人の侍女として事へることを許されました。

何と云つても命がけの奉公です。萬事萬端一つ一つに氣をつけ、心を配つて事へる勝子のつとめ振りには、どうしても普通の侍女達と異はなければなりません。勝子は新参ながら奥方第一番のお氣に入りになつてしまひました。一にも勝子、二にも勝子、奥方は勝子でなくては夜が明けぬものゝやうに、始終お傍に引きつけて召使はれた。其内にも月日は流れて、その年も暮れました。

それを知つた勝子は、天にも昇る喜びです。

當日、御催しの場に加はつて、敵佐久間をたゞ一撃に！勝子の胸は矢竹にはやつて、その目をのみ待ち暮しました。

して御催の場に加はるてだては？それはもう勝子の胸にはちやんと成算がありました。道三夫人にうまく取入つて、騎射御覧のお供に召連れられる——

『奥方様にお願ひが御座りまする、田舎出の私はまだ、産れて騎射と云ふものを見たことも御座りません、どうか一生の思ひ出に拜見の出来ますやう、是非奥方様のお供をおゆるし下さりますやう。』

斯うお氣に入りの勝子が折入つての御願ひです、奥方は果して譯もなく勝子の願ひをお入れになりました。

一切の準備は整ひました。あはれ正月十五日の待ち遠しさよ、一日千秋のおもひとはよく云つた言葉です、勝子はかきむしるやうな氣持ちで、その日を待ちました。

さて當日になりますと、城の廣場へ竹の矢來を結ひめぐらし、齋藤家の定紋染め出した紫のまん幕張つて、棧敷を作り、道三、龍興、奥方など、主君の御座所の前には簾をたれ、厳めしくも華やかな式場をしつらへました。十五人の選手は各自思ひ々の甲冑に身を飾り、矢を負ひ、弓を横へ、駒を進めて、如何にも立派やかに勇ましく、殿の簾前に一揖して名乗をあげます。

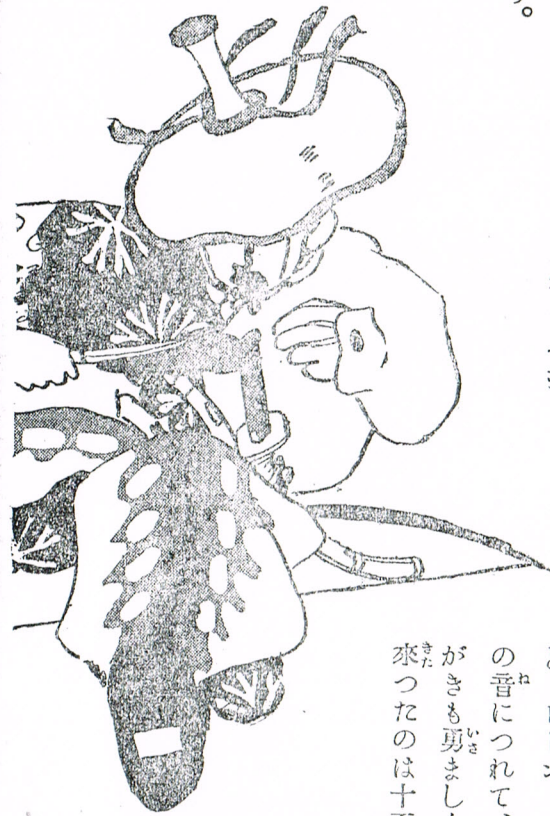
一番、二番、

三番、四番

十番、十二番、

——勇ましき騎士

士はそれからそれへと續いてあらはれました。けれども勝子が目差す敵の、當の佐久間七郎左



衛門の姿は十三、十四の其時までも見る事が出来ませんでした。残るは唯一番、勝子はもう氣が氣ではありません。  
『或は早くもそれを知られたか！』  
心は千々に思ひ亂れて、勝子は胸の動悸を制し得ません。

と、ドーン、ドーンと打ち出す太鼓の音につれて、トツ、トツと駒のあがきも勇ましく、此方を差して駆け來つたのは十五番の騎士、今しも簾前に一揖したその刹那、勝子は一目見て胸を撫

でました。  
『南無、弓矢八幡。』

勝子は静かに神を念じて時機

を窺つた。神ならぬ身の佐久間七郎左衛門、意氣揚々と名乗をあげる。

『われこそは人も知る武勇無双の佐久間七郎左衛門也。』

折柄勝子は矢庭に簾中ををどり出しました。

『良人の仇、思ひ知れ！』

とばかり、勝子の七首は電光石火、いきなり七郎左衛門を刺し、なほも無念の力にまかせて腹をるぐる、さしもの佐久間も不意をつかれたから堪りません、勝子の一撃に手も



それと見た警固の武士は四方八方から勝子を取巻きました。

『狼藉者、其處動くな！』  
『方々お静かに。本望達した上からは、決して逃げもかくれも致しません。』

かくて勝子は、わるびれ

もせず捕はれて御前に引かれて

の身となりました。そして道三父子の御前に引かれて糺問されました。勝子は佐久間の舊惡を語つて、  
( 47 )

仇打ちの順序を告げました。

『あつばれの女ではある。』

『あれこそは本當の烈女だ。』

並みある武士は皆感激して、口々にさゝやきました。けれども齋藤道三は家來に命じて、勝子をもつて獄舎に下さうとする。その時、道三夫人は見兼ねて口をきかれた。

『今夜だけ私の手に勝子をお預け下さいませう。』

と、夫人の強ての願ひに、勝子はとう／＼その夜、情深い奥方の手に警固される事になりました。奥方は勝子が哀れで堪りません、どうがなして命を助け

たいと思はれるけれども、さて如何しやうもない、いろいろ思案の末に若干かの金子を與へて、勝子

人知れず安全な土地へ逃さうとしました。

併しながら、勝子がゐなくなつて後の奥方の迷惑は解り切つて居ます、勝子は奥方の御迷惑を思ふと

自分自身の幸福ばかり願ふ氣持にはなれません。幾度となく奥方の言葉を辭退しましたけれども、奥方

はどうしてもお聞き入れにならないので、遂に岡崎に走つて、徳川家康の家來大須賀康高の許に身を寄せました。

けれども、勝子はまた其處にも落付いて居られなくなりしました。と云ふのは、佐久間七郎左衛門の兄盛政が、織田信長の手を経て、徳川氏に勝子引渡しの談判を初めたからです。併し家康もさるもの、一旦勝子を引受けた以上、たやすく信長の云ひになりなるわけには參りません。

『勝子は稀代の烈婦なり。』

斯う云つて、きつぱり織田氏の要求を断つてしまひました。で、とう／＼勝子の問題は、織田對徳川の重要外交問題となり、今にも兩國干戈を交へん有様とはなりました。

遂に勝子は覺悟を極めました。自分ゆゑに多くの人々に迷惑を及ぼすにしのびず、家康に恩を謝して潔く自害して果てました。——(をばり)